慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	永久革命者の悲哀 : 「もし魯迅が生きていたら」論争覚書 下
Sub Title	Sorrow of a permanent revolutionary
Author	長堀, 祐造(Nagahori, Yuzo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2006
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・ 文化・ コミュニケーション No.36 (2006.) ,p.1(102)- 25(78)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20060000-0102

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

永久革命者の悲哀

――「もし魯迅が生きていたら」論争覚書――　下

長堀祐造

本稿は「中国文学研究」第三十一期（早稲田大学中国文学会、二〇〇六年三月刊）掲載の上編に続くものである。冒頭にまず、全体の目次を掲げる。

目次

一、問題の発端
二、中国における「もし魯迅が生きていたら」論の展開――陳明遠編『仮如魯迅活着』から
（一）魯迅逝世十周年の「もし魯迅が生きていたら」
（二）一九五〇年の郭沫若の人民日報読者に対する回答
（三）一九八〇年の「反革命」詩「もしかれが生きていたら」
（四）李慎之、胡適、スノウの答え――靳樹鵬の文章「也説魯迅活着会怎様」から
（五）共産党との距離についての魯迅の自測――朱正「要是魯迅今天還活着……」の概括　以上　上
三、日本における「もし魯迅が生きていたら」――中野重治「秋の一夜」と荒正人「もし魯迅が生きていたならば――或る種の否定面について――」
四、毛沢東の魯迅観

五、丸山・代田論文について
六、もし魯迅が生きていたら――魯迅の自己分析に即して　以上　下

三、中野重治「秋の一夜」と荒正人「もし魯迅が生きていたならば――或る種の否定面について――」

さて、ここでは少し回り道をして、戦後日本に時を移す。新中国成立から間もない一九五〇年代、すでに日本でこの問題に触れた二人の文学者がいた。その一人が中野重治である。中野は魯迅と同時代を生きた文学者であり、周知のように、魯迅生前から間接的なやりとりが二人の間にあった。「藤野先生」の主人公藤野厳九郎は中野の郷里福井の人であり、中野は魯迅と藤野先生の二人を記念する活動にも参与している。そんな縁も含め、中野の魯迅その人その文学に対する関心は深い。とりわけ中野の転向問題に関する魯迅の文章は中野本人にも重要な意義を持ったと想像される[1]。その中野重治の作品に「秋の一夜」がある[2]。そこでは作中人物を通して中野の魯迅観が語られていると考えられる[3]。

「秋の一夜」（初出は「中央公論」一九五四年一、二月号）に出てくる中国文学者、石田博人[4]がこんなことを言う場面がある[5]。

> 魯迅が死んでから何年かになつていた。石田は、ある種の日本人が、「魯迅は知日家だつたから、あのあと生きていたら辛い羽目におちただろう。人の死をよろこぶわけはないが、いいときに死んで仕合せだ。」と発表したことのあつたのを、書いた人間の名も、雑誌の名も、文章の文句まで覚えていて業を煮やした。（表記は『中野重治全集』に従う）

魯迅の逝去は一九三六年十月十九日。「秋の一夜」には、一九四九年七月から翌年にかけてのイールズ演説とその後の「騒動」や、大

学の学園祭で魯迅についての講演企画が出てくることなどから、その「作中現在」は新中国成立間もない時期と思われる。また、作中に登場するアメリカ人ジャーナリスト・学者、たとえばアンナ・ストロングやジャック・ベルデン、オーウェン・ラティモアらの著作物の日本語訳刊行時期などから、一九五二年か一九五三年、つまり作品執筆時期とほぼ同じと見てよい。この「現在」から石田は戦中を回想しているのである。ここで石田が「業を煮やした」文章は誰がどこに書いた文章か。飯田吉郎編『現代中国文学研究文献目録・増補版』を見たが、にわかには判明し難い。一方、岩波書店の雑誌「文学」一九五六年十月号の魯迅特集にある「魯迅研究文献目録」には、小田嶽夫が一九三八年「新潮」八月号に書いた「日支事変と支那の文士」という文章に「魯迅が生きていたら」という記述があるという。そこで、「秋の一夜」が言う「魯迅が死んでから何年かになつていた」とは異なり、魯迅逝去後、二年もたっていない時期の文章だが、念のため調べてみた。関連部分は以下のとおりであった。

> 魯迅の名前が出た序でながら、魯迅が今在世してゐたなら彼はこの日支事変に対してどんな態度を取つたであろうかを想像することは興味がある。そして僕には彼は多分上海に踏み止まるのでは無いかという風にも考へられるのである。彼は共産主義に共鳴してゐるやうであるが、彼は支那の政治家をも青年をも信用してゐなかつたので、孤立の立場を取るのではないかということが考へ得られるのである。
>
> 魯迅の弟の周作人は、戦争と同時に多くの知識階級人が続々北京を去つて南下したにも拘らず依然として北京に止まつてゐる。
>
> ……（引用に際して、漢字のみ新字体に変えた）

読みようによっては、魯迅が弟の周作人同様、対日協力者になった可能性を示唆しているようにもとれる。しかし、「孤立の立場」というのは日本、中国双方の特定の政治勢力に荷担しないということだろう。執筆時期を考えれば、小田ははっきり魯迅も対日協力者になっていたろうと、いい加減な推定をしても困らなかったはずで、むしろ魯迅は共産主義に傾いていたなどとわざわざ言うのは小田の良心とも言えなくもない。「孤立の立場」にしても然りである。やはり、この文章は作中人物石田博人が「業を煮やした」ものである可能性は

低かろう。ちなみに中野は一九四一年、読売新聞に、小田の書いた『魯迅伝』を比較的好意的に紹介している。

ところで、魯迅は知日派だったから、生きていたら「親日派」＝対日協力者になったであろうとする見方は、特に魯迅晩年の抗日統一戦線への強い関心を見れば、極めて皮相なものであることがわかる（もっとも、魯迅は国民党への強い警戒心を隠さなかったのであはるが）。近年台湾の魯迅研究の一部にはこうした皮相な見方があるようだが、[6] まったく賛成できない。しかし、「知日」と「親日」を区別し得ぬ、往時日本の「中国通」の間には存在しうる俗論ではありえたろう。対日協力者として戦後「漢奸」とされた魯迅の弟・周作人は大学者であり、知日家の最たる存在であった。

ともあれ、中野はこの作品で「魯迅が生きていたら」という問題を、戦後いち早く問うた一人ということになる。そして、日本軍国主義に連なるある種の民族主義的「俗論」に反駁を加えたのであった。

さらに数年後、別角度からこの問題を提起したのは荒正人であった。[7] 荒は「もし魯迅が生きていたならば――或る種の否定面について――」（岩波書店「文学」一九五六年十月）で、あえて魯迅の否定面について語ろうとした。周知のように、荒は戦後まもなく、平野謙とともに、中野から厳しい批判を浴びた。[8] サブタイトルにある「或る種の否定面について」とは一言で言うならば、魯迅はソ連でのスターリンの粛清を知っていながら、ソ連や中共を支持したが、スターリン批判の今日（一九五六年当時）生きていたら、そのことをどう総括したかという点に尽きるだろう。トロツキー派を批判した文章も魯迅は書いたではないか、とも言う（もちろんこれは極めておおざっぱな私なりの言い換えであるが）。さらにこう言う荒の根底にあるのは、日本の魯迅礼賛者に対する反発だったことは本文からも明瞭である。ただ荒は、いわゆる魯迅精神や毛沢東の魯迅評価は否定せず、「魯迅に心惹かれるためであるが」という保留をつけている。私としてはこの文章で荒が言う魯迅に対する疑義にはほとんど賛成できないのではあるが、荒が言わんとしたことは、この時点での日本の左翼知識人の発言としてはなかなか勇気のいるものだったろうとは想像がつく。フルシチョフのスターリン批判直後、ハンガリー動乱前夜の作という情勢を考えると、ある種の時代性を感じるが、魯迅の否定面をこの時期に書こうなどという人は実際そうはいなかったのであるから。ここで、「秋の一夜」その他の中野の魯迅論を思い起こすと、荒は中野に代表されるような（少なくとも中野も含むような）左翼的（毛沢東的・スターリン主義的と言ってもいいが）魯迅観を念頭に置いて批判していることは間違いない。

しかし、一見相反する中野、荒二人の魯迅評価も実は肯定と否定という評価のベクトルの違いだけであって、前提となる魯迅＝「革命的文学者」というイメージ（つまりは毛沢東が作り上げた神格化された魯迅とでも言っていい）については一致しているのではないか。荒は発想において優れたものを持ってはいたが、如何せん当時の中国、日本の魯迅研究の水準を超えて、立論することはできなかった。魯迅が一九二〇年代、トロツキーの『文学と革命』を訳したり、晩年は周揚からトロツキスト呼ばわりされたり、さらには魯迅のトロツキスト批判の作品とされた「トロツキー派に答える手紙」が魯迅の筆でないこと[9]、病気療養のためのソ連行きを中共から勧告された際、ソ連国内の粛清騒ぎを理由の一つとして拒絶したこと等々を知る由もなかった[10]。荒がまたここで、魯迅は日本やヨーロッパの近代を知らなかったとか、その格闘の質もヨーロッパ知識人に及ばないとかいう物言いにもそう簡単には首肯できない。むしろ魯迅礼賛者（荒は彼らをスターリン主義者と見なしていたのだろう）憎しから来る荒の言い過ぎと断ぜざるを得ないのだ。しかし、それでも荒のこうした視点には魯迅の真実、実像に近づく契機が存在したということはできる。その点、「秋の一夜」の石田＝中野の「左翼的常識」の視点よりも一歩先んじていたとも言える。そして、今回の中国における「もし魯迅が生きていたら」論争も基本的にこの「常識的」魯迅観（中共・毛沢東的魯迅観）と「あるがままの」魯迅観（非中共・非毛沢東的魯迅観）[11]の対立と捉えることができるのではないかと思うのである。

四、毛沢東の魯迅観

毛沢東が魯迅作品をどう読み、魯迅をどう評価していたかということについては、張貽玖著「毛主席和魯迅著作[12]」と徐中遠著「読魯迅著作[13]」の二編の論文があり、日本では小山三郎がこの二編を詳しく紹介している[14]。さらに、本稿・上の注7でも触れた易厳著『毛沢東与魯迅』も、観点や資料処理に大きな問題はあるものの参考にはなる。詳細はそちらに譲るとして、ここではこれら資料に拠って毛沢東の魯迅評価をもう一度簡単に確認しておきたい。

毛沢東は長征以前には魯迅作品を系統的に読む機会はなく、一九三五年末以降、延安でその機会を得る。そして、一九三八年に上海で出版された最初の『魯迅全集』、魯迅先生紀念委員会編『魯迅全集』（全二十巻）や一九五〇代半ばに出た注釈付十巻本『魯迅全集』、さ

らには加齢のため視力の衰えた毛沢東のために特注されたその大字版などを終生身辺において、繰り返し読んでいた。一九七六年九月九日のその死の時も机上にはこの大字版が置かれており、毛沢東は、死の直前まで魯迅を読んでいたことがわかっている。

さらにいくつか、興味深いところでは、毛沢東は建国直後の一九四九年十二月にソ連を訪問した際も、『魯迅全集』の数冊を携帯し、モスクワの宿舎で食事を後回しにして読みふけり、食事中もスタッフに、「私は魯迅の本を愛読しているが、魯迅の心と我々は通じ合っている。私は延安で、夜魯迅の本を読んでは、しばしば寝るのを忘れたものだ」[15]と語ったというエピソードが残されている。また、毛沢東蔵書中の『魯迅全集』には多くの圏点や線、それに一部書き込みがあり、毛沢東が精読した作品、魯迅作品の執筆時期に対する大きな関心、さらには魯迅後期の雑文をことに愛読し、小説では「阿Q正伝」を好んだことなどがわかる。「文芸講話」での魯迅文章の引用部も、その蔵書中の『魯迅全集』で対応部分に書き込み（圏点、線などを含む）があることが確認できるという。

毛沢東が書き込みを残した魯迅作品の中、張、徐論文が具体例を挙げて分析しているのは以下の通り（小山論文はこれを十二箇条にまとめている。具体的引用はここでは省略）。

「『酔眼』中の朦朧」（『三閑集』）、「翻訳について（下）」（『准風月談』）、「もってこい政策」（『且介亭雑文』）、「まさに時節である」（『花辺文学』）、「天才の出るまえ」（『墳』）、「トロツキー派に答える手紙」（『且介亭雑文末編』）、「徐懋庸に答え、あわせて抗日統一戦線の問題について」（同前）、「『硬訳』と『文学の階級性』」（『二心集』）、「死」（『且介亭雑文末編』）、「左翼作家連盟に対する意見」（『二心集』）、「上海文芸の一瞥」（同前）、「我々には批評家が必要である」（同前）、「『三閑集』序言」（作品タイトルは「トロツキー派に答える手紙」以外は学研版『魯迅全集』の訳名に従う、順序は小山論文への登場順）。

ちなみに一九三八年版『魯迅全集』に収められた「トロツキー派に答える手紙」[16]に、毛沢東は三重丸を施しているそうで、その重視ぶりが窺える。さて張、徐の分析から見て取れるのは、魯迅作品に対し、毛沢東はかなり実際的な読みをしていたのではないかということである。「実際的」とは、そのときどきの自分の問題意識、政治思想課題に引きつけて読んでおり（これは毛沢東に限った読書法ではないが）、読書時との時間差はあるとしても、現実的な政策決定や思想的態度決定の際の参考にしていたということである。たとえば、上記「翻訳について（下）」に出てくる「腐った林檎（下手な翻訳の喩え）」でもないよりましだという論は経済や文化政策一般にも通じる

ものであるし、「天才の出るまえ」に対する共感も、文革中の林彪、陳伯達の天才論に毛がなぜ怒ったかを説明してくれそうだ。「文芸講話」への引用はまさに政治の現場の必要に迫られたものであろうし、「トロツキー派に答える手紙」への三重丸も、この文章の政治的意味を毛沢東が十二分に意識していたことを表していよう。その他、人民共和国建国後においても、毛沢東は困難な状況に置かれたときや、政治運動を発動するときに魯迅を読んでいたのではないかと想像される節がある。たとえば、一九五八年五月の「在中共八大二次大会上的講話提綱（中共八大二次大会での講話提綱）」ではこう言っている。「思想上、政治上、自己解剖をするときは必ず、魯迅に学び、『魯迅全集』を読む[17]」と。一方、いかに毛沢東が魯迅を「利用」したかについての例として、易厳は、一九六〇年代初頭、毛沢東が魯迅の『中国小説史略』から譴責小説を引き合いに出し、しばしばこれに言及したことを指摘し、一九六二年八月十一日の「北戴河中央工作会議核心小組会」での言葉を引く。「今、総路線に反対し、三面紅旗に反対する者は、情勢は真っ暗だと言う。ちょうど『官場現形記』のような小説のように暗黒面ばかりを書いている。魯迅はこれを譴責小説と呼んだが、暗黒を暴露するばかりだったので、人びとは好まなかった[18]」と。そして易厳は「魯迅の言葉や文学作品中の事柄は、しばしば毛沢東によって、政治批判の武器として使われた」と結論づける（但し、易厳は毛沢東礼賛の立場からこれを書いているので、決してそれを批判しているわけではなく、むしろこれは魯迅にとっての名誉だとする口吻である）。

ところで、毛沢東は魯迅のどこがそれほど気に入っていたのか。同じく易厳が紹介する二つの資料を引こう。一は、一九八〇年二月二七日付「人民日報」の記事。毛沢東が延安時代に周揚に語った言葉である。「魯迅の作風は謙虚さと大胆な判断とが結合している。つまり、自分の知らないことは知らないといい、虚心に他人の教えを請い、物知り顔をしたり、しったかぶりしたりしない。自分が確信して疑わない事は、自分の観点を公にして毫も曖昧にせず、決して譲らない、ということだ」と。二は、文革初期の一九六六年七月八日付の江青宛書信である。「私と魯迅の心は通じている。私は彼の正直さが好きだ。魯迅は、自己解剖は、しばしば、他人を解剖するより厳しくなるものだと言った。私も何回かつまづいてから、しばしばそういう具合になった[19]」

毛沢東はどうやら、魯迅の謙虚さと大胆さ、そして、その正直さが好きだったようである。一方で穿った見方もある。毛沢東は「魯迅は大学を卒業しておらず、旧社会では、講師になれても、教授になれなかった」（一九五六年の「十大関係論[20]」）と語り、またエドガー・

スノウにも自らの北京大学図書館職員時代を回顧して「私の地位は低かったので、だれも私を相手にもしようとはしなかった。私の仕事のひとつは図書館に新聞を読みに来た人の名前を記録することであったが、そうした人びとのほとんどにとって、私は人間としては存在しないも同然だった」[21]と北京大学教授たちの冷淡な扱いに侮辱を受けたかのような語り口で語っている。大学出や教授が嫌いな毛沢東は、そのどちらでもなく、しかも彼らより権威を持った魯迅に共感したのだと。一面の真実をもつかもしれない。

さて、こうしてほぼ一貫して魯迅を礼賛してきた毛沢東だが、魯迅に対する留保を示した例がないわけではない。早くは一九四二年、延安での「文芸講話」中、魯迅式の雑文が根拠地で適合するかどうかという問題を提起し、双百時期の一九五七年三月十二日には「在中国共産党全国宣伝工作者会議上的講話（中国共産党全国宣伝工作者会議での講話）」[22]でこう言っている。（次章での行論の都合上この引用部をCとする）

> 魯迅の後期の雑文は非常に深みがあり、力強く、一面性がない。つまり、魯迅はこの時すでに弁証法を学んでいたのである。レーニンの一部の文章は雑文と言えるが、諷刺もあって、書き方もとても鋭いものの、そこには一面性はない。魯迅の雑文の大部分は敵に対してのものであるが、レーニンのそれは敵に対してのものもあれば、同志に対するものもあった。魯迅式の雑文は人民内部の誤りや欠点に対して用いても構わないだろうか？　私は構わないと思う。もちろん敵味方をはっきり分け、敵対的立場、敵対的態度で同志に対してはならない。（C）

魯迅礼賛には違いないが、魯迅前期の雑文は「一面性」を免れないということを示唆しているし、最後の部分は、「文芸講話」においては味方陣営での使用に否定的だった魯迅式の雑文形式を一部復権させてはいるが、魯迅（の批判的精神）に対する制限は忘れていない（次章で取り上げる丸山論文によれば、毛沢東のこの発言は当時の文学者たちに「一種のショックあるいは解放感」を与えたという）。

ともあれ、毛沢東が魯迅を読み、魯迅に励まされていたことは間違いないだろう。そしてそれは、多くの魯迅の読者にも共通する経験であり、魯迅文学に限らず優れた文学・芸術のもつ力である。毛沢東が魯迅のテクストを「利用」したとして、その「罪」を死せる魯迅

に着せることはもともとできない話なのである。

本来ならば、さらに詳細に毛沢東の魯迅評価が見えるテクストを時系列に従って検討すべきところだが、紙幅と時間の関係上、またの機会に譲るほかない。

さて、一九三七年以降のテクストで、魯迅を高く評価してきた毛沢東であるが、毛沢東と魯迅の仲介役的存在であった馮雪峰は、文革中、興味深いことを牛漢に語っていた。牛漢の言を聞こう。

五四運動の頃の数年、毛沢東は北京大学の多くの人物と交際がありましたが、魯迅とは交際がありませんでした。毛沢東がいつ頃から魯迅に注意を向け始め、興味を持ち出しのか。馮雪峰は私にこう言ったことがあります。長征以前［長征は一九三四年秋以降——長堀注。以下同］の瑞金で、瞿秋白は当時人民教育委員、馮雪峰が党校校長で、毛沢東はまったく権力を持っていなかった。三人はほとんど毎日顔を合わせては酒を飲み、憂さを晴らしていた。この時、自分と瞿秋白を通して毛沢東はようやく魯迅に注意を向け始めたのだが、毛は生涯魯迅を理解しなかった、と。文革の頃、私は馮雪峰と一緒の「［文革中監禁された］牛小屋」に住んでいました。私は横になるやすぐ寝てしまうのですが、馮雪峰は寝つけず、いつも私をつついては、『ちょっと起きろよ、僕はコーヒーが飲みたい。砂糖抜きだ』と言うのです。雪峰はひどく寂しかったのです。そしてこう言いました。『［文芸］講話の基本精神は五四精神や魯迅精神とは正反対だ』と。これは馮雪峰が生涯心の奥にしまい込み、晩年になって口にした言葉でした。魯迅に対してはまず利用があったばかりではなく、監視もあり、作品を通して魯迅に好き勝手に話したり、行動したりさせまいとしたのです。[23]

つまり、毛沢東は魯迅の最晩年（少なくとも一九三四年ごろまで）までは、政治的にはともかく、個人的には魯迅に関心を持っていなかったということである（これはまた、本稿・上で触れた靳樹鵬の文章が指摘する、初期毛沢東のテクストでは陳独秀は大きな存在として出てくるが魯迅は出てこないということと呼応する。五四期の総司令が誰だったのか、陳独秀をその地位から追い落とし魯迅を据えた、後の中共の評価を、中国トロツキー派は歴史の偽造とするが、初期毛沢東のテクストを見てもそれは明らかなのである）。また延安で魯

迅を読み始めて以降も、毛沢東の魯迅愛読は謂わば毛沢東の片思いであり、魯迅精神の本質を毛沢東は結局つかめなかったのだということを馮雪峰は言いたいようである。現象を見る限り馮雪峰の言は当たっている。そして、馮雪峰という魯迅と毛沢東双方を最もよく知る当事者の言葉として、これは、（状況からして軽口、愚痴に類する言葉ととれなくはないとしても）衝撃的ですらある。しかし、党内そして国内の権力を掌握していった毛沢東は少なくとも、権力者の本能（毛沢東の想定する社会主義のイメージ、進路）において魯迅の批判精神の危険性をよく感知していたことは否定できない。その意味では毛沢東はやはり魯迅をよく理解していたと言えるのである。

五、丸山・代田論文について

紙幅の関係で、両氏の所論については詳しく論評できないので、丸山論文のポイントを中心にコメントしておきたい。丸山の二つの文章のうち、「最近の魯迅論議から考える」上下（「季刊中国」七五～七六号、二〇〇三年冬号及び二〇〇四年春号）は二〇〇三年四月の講演をまとめたもので、「下」の第四章が「もし魯迅が生きていたら――毛沢東と魯迅」となっている。本人の言によれば、この第四章の「ダイジェスト+多少の加筆」版が「公孫樹人」第三号（東大中文科同窓会誌、二〇〇四年五月）に掲載された同タイトルの「もし魯迅が生きていたら――毛沢東と魯迅」である。そこでここでは、簡潔にまとめられた後者を論評の対象とする。

丸山論文の重点は、百花斉放百家争鳴から反右派闘争へ到る一九五七年の一連の毛沢東の魯迅に関するコメントを詳細にみて、その流れの中に、問題となっている羅稷南に対する毛沢東の答えを位置づけるべきというところにある。[24]

ここで丸山が言うこの時期の毛沢東の魯迅コメントとは、具体的には一九五六年三月八日の「文芸界との談話」、三月十日の「新聞出版界代表との談話紀要」、そして前章で触れた三月十二日の「中国共産党全国宣伝工作者会議での講話」である。最後の文章は前章で訳出し（C）としておいたのを見て頂くとして、以下長くはなるが、本稿のレビュー的性格と読者の便を勘案し、前二者を丸山論文からそのまま引いておく。[25]

魯迅は共産党員でなかったが、彼はマルクス主義の世界観を理解していた。彼は大変な苦労をして学び、そして自らの実践を通してマルクス主義が真理だと信じるようになった。とりわけ、彼の晩年の雑文はとても力強い。彼の雑文が力強さをもっているのは、マルクス主義の世界観があるからだ。私が見る限り魯迅が仮に死んでいなければ、まだ雑文を書いているだろう。小説はもう書けなくなっていても、おそらく、文連の主席（文学芸術界連合会：丸山注）になっているだろう。彼が会議の席で三十三の問題について話したとしよう。彼が一度話をするか、あるいは雑文を書けば、すぐに解決するだろう。彼には必ず話すべきことがあるし、きっと話しただろう。しかも大変勇敢だった。

真のマルクス主義者とは何事も……またいかなる人をも恐れないものだ。誰かが痛めつけるかどうかなどおそれない。せいぜい食う飯がなかったり、乞食をしたり、罰せられ、投獄され、打ち首にされ、あるいは冤罪に問われるかだ。私は乞食をしたことがないが、もし革命をやろうとするならば打ち首にされる覚悟がなければならない。敵に殺されるのは無念ではない。ソ連のように仲間に殺されるのは無念なことだ。だからわれわれには一つの原則がある。一人も殺さないということだ。だが、投獄されるかどうかは何とも言えない。一人の人間が生涯で少しばかり罰を受けるのはやはり必要なことだ。（A）

諸君は魯迅に賛成するかね。魯迅の文章は軟らかすぎず、かといって硬すぎず、読みにくくもない。雑文を書くのは難しいと言う人がいるが、難しいのはこの点にある。ある人が魯迅が今も生きていたらどうだろうかと尋ねた。私が思うに、魯迅が今生きていたら、彼は敢えて書きもし、また敢えて書かないだろう。正常でない雰囲気の中では、彼も書かないことだってある。しかし、書く可能性の方が高い。……本物のマルクス主義者で、徹底した唯物論者は何も恐れない。……だから彼が書くというのは十分にありうる。

現在の作家の中には書こうとしないものがいる。二種の情況があるためだ。一つは、彼らのために書こうとする環境をわれわれが作ってやらなかった。そこで彼らは痛い目に会わ（ママ）されるのを怖がっているという情況だ。もう一つは、彼ら自身が唯物論をまだ学びとっていないという情況である。徹底した唯物論者なら書こうとする。魯迅の時代には、痛い目に会わされるというのは、獄に繋がれ、首を斬られるということだった。だが魯迅はやはり恐れなかった。今の雑文はどのように書くのか、……（われわれには）まだ

経験がない。魯迅をもってきて、みんなで彼に学び、よく研究してみようと思う。彼の雑文には多方面のことがいろいろ書かれている。とりわけ後期には政治を語ることが最も多かった。……魯迅の作品はすべてやむなく書いたものだ。彼のマルクス主義もまたやむなく学んだものだ。彼は知識人家系の出だ。人は彼を封建の残りかすだと言い、彼はだめだと言う。……国民党は彼を圧迫した。上海のわが共産党も彼を痛めつけた。両方から攻められたわけだ。だがそれでも魯迅は書いた。（B）

実はこのＡＢＣの毛沢東のコメントを重視せよとの主張は、本稿・上の二で見た陳明遠編『仮如魯迅活着』所収の幾人かの論者と同じ視点である。たとえば、謝泳、陳晋はそこから、毛沢東と羅稷南の問答は架空のもので、毛沢東の答えはこのＡＢに含まれるものではないかと推測していたのだ。無論これは現場にいた証人黄宗英の出現によって打ち消されたが。丸山の当初の発想も謝、陳らに近かったようだ。一方、「考証大師」の朱正は、これらＡＢＣなどを押さえた上で、本稿・上の二で紹介したような結論に到るのである。

さて、丸山論文は、こうしたＡＢＣの毛沢東発言からして、羅稷南との問答から後知恵的に「独裁者のホンネ」を導き出すのはフェアではないという出発点に立つ。

「毛沢東が魯迅を高く評価したのは政治的に利用したに過ぎず、魯迅といえども必要なら投獄するぞというのが、冷徹な政治家さらには独裁者としての毛沢東のホンネだとする見方には、やはり同意し難いのです」（当該誌八頁）。

そして、Ａの毛沢東について「この頃毛沢東は党の中の官僚主義に対して相当に業を煮やしていたと考えていいと私は思います」とし、だから、魯迅が死んでいなければ雑文を書いていただろう、云々という毛沢東の言葉は、「魯迅がいたら、官僚主義者たち、あるいは官僚主義が強くなった党が、誤って彼を弾圧することもあったかも知れないが、魯迅はそれに屈しないで批判を続けただろう、と取るのが自然だと思うのです」とする。また、Ｂで毛沢東が魯迅晩年の周揚らとの対立に触れるのも「党（の少なくとも一部）が誤って彼［魯迅］を批判・非難したこと、そのような状況は今でもあるいは今後もあり得ることを意識していたことが現れている、と私は読みます」とし、毛沢東の羅稷南への回答も「当時の毛沢東の『真意』は、こうだったと決めるだけの決定的資料はまだなく、私にも躊躇があります。ただ、反右派闘争になって手のひらを返したようにこういう言い方をした、そこに本音あるいは本質が現れたのだ、と簡単に決めこむこと

は歴史とその中における人間の思考や選択を、あまりにも単純化するものだ、と思うのです」とする。

ＡＢ（Ｃも含め）に関する丸山論文の解釈は否定しきれない。しかし、そこから、毛沢東の羅稷南への回答が、依然として共産党の官僚主義批判に主眼があり、自らが魯迅を投獄する可能性に言及したものではない、とは言い切れまい（丸山論文は断定できないという結論だが）。

この点は日中魯迅研究の「考証大師」、丸山、朱正の見解が分かれるところである。まず、本稿・上の二の朱正の言を繰り返すが、朱正は反右派闘争がすでに公然と始まっていたこの七月七日、羅稷南の質問は「魯迅がいま生きていたらどうだったか」とは「魯迅がいま生きていたら右派にされたか」という問いに等しく、毛沢東ももちろんそれを重々承知の上で答えているとする。これに反論するのは難しい。その場の張りつめた雰囲気を伝える黄宗英の証言も朱正説を補強するように私には思える。[26] やはり、毛沢東は反右派闘争に際しての断固たる決意、朱正の言を借りれば、「書きたければ牢獄で書け。牢獄に行きたくなければそれもいいが、それなら一言も書かないでくれ」という二つの選択肢を、生きていれば魯迅にも適用するという断固たる反右派闘争への決意を述べたと考える方が自然ではないか。自らが右派・反革命にされてしまった経験を持つ朱正の見方は極端に走りがちと見えるかも知れないが、私としては彼の「考証大師」としての身上をより重視したい。毛沢東の羅稷南への答えが三月の講話の延長線上にあるとしても（そのこと自体は否定できない）やはり、七月七日には「突破」があったと考えざるを得ないのである。また、刻々と変わる当時の反右派闘争の状況変化を踏まえた考証結果としての朱正見解は、必ずしも丸山論文が言う「単純化」には当たらないのではないか。

以下は感想の域を出ないが、丸山論文の「毛沢東が魯迅を高く評価したのは政治的に利用したに過ぎず、魯迅といえども必要なら投獄するぞというのが、冷徹な政治家さらには独裁者としての毛沢東のホンネだとする見方には、やはり同意し難いのです」という部分についてだが、これも朱正とは外見上は真っ向から対立するように見える。しかし、本稿・上の二で引いたように朱正は毛の羅への答えを受け、「こうであってこそ毛沢東だ。違う答えをするならそれは毛沢東でない」と言い、毛沢東が社会主義の原則問題で決して譲歩しなかったことを言う。朱正はここでは、「本音」の是非や、「冷徹な政治家、独裁者」などの価値判断を超えて、単に客観的に毛沢東を分析しているに過ぎないとは言えないだろうか。そこには一部、革命家毛沢東に対する共感すら見えてしまうのだが、どんなものだろうか。Ｍ・

レヴィンは『レーニンの最後の闘争』[27]でトロツキーがスターリンに敗れた理由の一を、トロツキーがレーニンのように、断固たる酷薄さ（私の要約した語であるが）を持たなかったことに帰しているが（同書一五八～一五九頁）、毛沢東は（その結果がどうあれ）トロツキーと違い、レーニンのそれを引き受ける勇気と気概を持っていたことは確かである。

毛沢東による魯迅の政治利用についての朱正の見方も、空論ではなく、一定の根拠を持つ客観論であり、為にする反毛沢東言説とは取りにくい（確かにトロツキスト王凡西の論に通じるものがあるが）。そしてすべてを動員せんとする「政治」（これは「政治」という語の定義に含まれるであろう）が、文学者をも「利用」するそのこと自体を非難するのは難しいし、無意味ですらあろう。もちろん「利用」に際しての「公正」「不公正」、「誤解」「曲解」などは論じうることであり、また、「利用」する側の主観的意図（志）の是非やその高低も測られうるだろうが、朱正の論はそれをも含めて毛沢東の指導権確立から七十年を経て見えてきた毛沢東と魯迅の客観的な「歴史」を書いているに過ぎないように私には思える。そしてこの場合、その死後「利用」された魯迅の責任を、毛沢東の責任と混淆して問うことの無意味さはより明らかになるであろう。

さて、丸山論文冒頭に、蕭軍、胡風、馮雪峰ら魯迅と関係の深い文学者が新中国で粛清されたことについて、「この現象は誰にでも目につくので、中国から見た「外国」および台湾には魯迅と毛沢東はもともと相容れなかったのではないか、そもそも共産主義は自主性をもった知識人の存在を許さないものだといった議論に結びつける人もいました」と大きな問題提起があり、感想を述べたいが、ひとことでは難しいので今後の課題とする。

ついで、代田智明著「ロシナンテの影――『もし魯迅が生きていたら論争ノート』」（「中国研究月報」二〇〇四年八月）についてひとこと。すでに予定の紙幅が尽きているので、紹介と断りだけを記す。代田論文は、「もし魯迅が生きていたら」論争の展開をスケッチする。本稿では詳しく紹介できなかった羅稷南、黄宗英ら登場人物たちの伝記的事実や毛・羅問答の現場のディテールなどが書き込まれている。また、本稿では触れられなかった、陳明遠編『仮如魯迅活着』等収録の他の論者・論点についても、その紹介と代田のコメントが記されている。本稿とは視点を異とするとはいえ、重複する箇所もある。同時に代田、丸山で重複する部分もある。本稿とあわせて両氏の論文を参照して頂ければ幸いである。

六、もし魯迅が生きていたら――魯迅の自己分析に即して

最後に簡単に私なりのこの問題に関する答えを試みる。発問の時点は、とりあえず羅稷南と同様、反右派当時として考える。本稿・上の冒頭でも書いたが、この問題は魯迅をどう見るかという魯迅観の問題でもある。そして、この問いに答えるには、基本的にまず、魯迅自身の歴史における自己認識、中国共産党や社会主義革命、ソ連への言及とそれらに関連しての自己規定（それらからの距離の自己測定といってもいい）に即すべきであろう。ここでは主として旧拙稿中からヒントになりそうなところを拾い上げ、答えを導いてみたいと思う。[28]

（一）旧社会の人間という魯迅の自己認識

魯迅は自分自身をあくまで、滅び行く側の人間、旧社会の人間と意識してきた。いくつか典型的な例をあげる。いずれも一九三〇年の作物である。

「人びとはしばしば神話の中のプロメテウスを革命者になぞらえた。火を盗んで人に与えたがゆえにゼウスの迫害に遭ったが、後悔しなかったその度量の広さと忍耐強さが革命者と同じだというのである。しかし、私がよその国から火を盗んで来た本意は、自分自身の肉を煮るためであった。もし、味がよければ咀嚼する者の側にもかなりの利点があり、私もその身を無駄にしなくてもすむかもしれないと思ったからである」（「『硬訳』と『文学の階級性』」、『二心集』所収）

魯迅が言う火を盗むとは、プロレタリア文学理論書翻訳の比喩である。

「「一九二八年の革命文学論争で、創造社、太陽社が魯迅を攻撃したころ」私はそのころ、マルクス主義批評という銃撃の名手が現れて私を狙撃してくれるのを待ちました。しかし、結局は現れませんでした。」（「左翼作家連盟に対する意見」、同右）

また、自分にも自由がないのに、中国自由大同盟の発起人になった魯迅は、踏みつけにされる「梯子」だという一部世論に対し、こう

言った。

「梯子の論、至極もっともです。これについては私もよく考えたことがあります。もし本当に、後起の諸公がこれによってかなり高くまで上れるなら、私が踏まれることなど取るにたらぬことです。中国で梯子になれるのは実際のところ、私を除けば幾人もいないのですから」（一九三〇年三月二七日付、章廷謙宛書信）

こうした認識は汪暉の術語である「歴史的中間物」意識と隣接する。汪暉はそうした魯迅の自己認識が現れている文章として、「我々はいまいかにして父親となるか」（一九一九年、『墳』所収）、「両地書・二四」（一九二五年）、「影の告別」（一九二四年）、「墓碑銘」（一九二五年、ともに『野草』所収）などを挙げている。[29] これ以上の引用はしないが汪暉の指摘は適切である。

さらに、魯迅がロシア・ソ連の詩人ブロークや日本の有島に示した共感も、彼らにこうした自らと相似た資質、自己認識を見いだしたからにほかなるまい。[30]

（二）魯迅の「同伴者」という自己規定

（一）の自己認識とも密接に関連するが、左翼運動との関係において、魯迅は自分を「革命家」や「革命人」とは規定していなかった。一九三一年、上海で魯迅から直接教えを受けた増田渉は魯迅が自分のことを「同伴者作家」と言っていたと証言している。[31]「同伴者作家」とはトロツキーが『文学の革命』の中で提起したタームであるが、魯迅は「『竪琴』前記」[32]（『南腔北調集』所収）で、米川正夫の『ロシヤ文学思潮』（三省堂、一九三二年）によりながら、この明確な定義を紹介している。

> しかし、当時［ＮＥＰ期］、こうした文学団体［セラピオンの兄弟たち］の出現は、確かに驚きであったが、ほどなく、［ソ連］全国の文壇を席巻した。ソ連にあって、このような非ソヴィエト的文学が勃興したことはまことに不思議なことであった。しかし、理由はきわめて簡単である。当時の革命者はちょうど実践活動に忙しく、こうした青年たちだけが、比較的優れた作品を発表したというのが、その一。彼らは革命者ではなかったが、鉄と火の試練を体験したので、おおよそその描写する恐怖と戦慄、興奮と感激とは、

容易に読者の共感を得たのが、その二。その三は当時、文学界を指揮していたウォロンスキーが彼らを大いに支持したことである。トロツキーも支持者の一人で、これを「同伴者」と読んだ。同伴者とは、革命の中に含まれる英雄主義によって革命を受け入れ、ともに前進するが、徹底的に革命のために闘って、死んでもかまわないという信念はなく、単に一時的な道連れにすぎないという謂である。

魯迅は「徹底的に革命のために闘って、死んでもかまわないという信念」は少なくとも積極的にはないことを増田青年に語ったのである。最晩年には「同伴者」魯迅にも生命の危険が生じる事態も出来するが、それによって魯迅が「革命者」や「革命人」に自己認識を変えたとは思われない。

さらに、魯迅は革命文学論争当時、しきりにソ連の同伴者作家の運命について語っている。「文芸と政治の岐路」（一九二七年十二月、『集外集』所収）という講演で、魯迅はエセーニン、ソーボリといった同伴者の自殺にふれる。拙稿を引く。

> 魯迅は同伴者を待つ悲劇的宿命の原因を「理想と現実は一致しない」という「定められた運命」に求める。革命がなければ理想はそのまま保存されるが、革命があったことで逆にそれは現実との乖離によって粉砕されるということである。エセーニン、ソーボリが「自ら謳歌し希望した現実の碑にぶつかって死んだ時、ソヴィエトは成立した」という魯迅の結末部の言葉は、その時革命の存在が証明された、ということに等しい。中国に真の革命を望んだ魯迅には、仮にその希望が実現した暁には自身も「同伴者」の悲劇的宿命を引き受ける覚悟があったのであろう[33]。

（三）魯迅のソ連観、スターリン観

ここでは一々引用はしないが、革命文学論争のころの文章を読んだ印象では、魯迅はまずソ連を実際に社会主義革命が実行された国ということで、そこに（二）で見たような現実と理想の乖離が存在したとしてもできる限り前向きに尊重しようという態度が見受けられた

ように思われる。比較対象はもちろん中国で、そこには革命はない、という認識が魯迅にはあった。しかし魯迅最晩年のソ連ではスターリンの粛清が始まっていた。これに危惧を抱いた魯迅は、周囲の公式非公式ルートでの療養のためのソ連行きを断っている。公式には魯迅は、ソ連に行けば文章が書けなくなるし、蔣介石とも戦えなくなるといって断ったことになっているが、一九八八年に金城は「魯迅は新聞でスターリンがちょうど反対派粛清を拡大していることを知っており、そうしたソ連に行くのはやはり不都合だったのである」としている。トロツキー、レーニンについては肯定的な言及はあるが、スターリンには言及がほとんど無く、「トロツキー派に答える手紙」を除くと、ただ一カ所魯迅テクストに現れるスターリンには、否定的なニュアンスがある。[34] それはソ連のマラシュキンの小説『右側の月』に関するコメントに出てくる。曰く「しかし、レーニンを描いた数カ所は名人の手になるスケッチのごとくで、極めて溌剌としている。もう一人ロシア語があまりうまくない男が出てくるが、多分これこそスターリンであろう。彼はジョージア、つまり『鉄の流れ』に出てくるグルジア生まれだからだ」[35]と。トロツキーに対する言及などとは比すべくもないほどの扱いである。

ここの（二）（三）の内容をあわせて見ると、本稿・上の二で述べた朱正の紹介する、「君たち［共産党］がやってきたら、まず私を殺すんじゃないか」とか革命になって「それでも命があるなら、赤いチョッキをもらって、上海の道路掃除でもやりましょう」云々という魯迅の言も比較的容易に納得がいくというものだ。しかし、再度確認するが、魯迅にあってはそれは反共、反社会主義ということにはならないのである。

（四）もし魯迅が生きていたら

さていよいよ答えの段である。以上から共産党政権下の魯迅を想像するときに、まず思い浮かぶロシアの同伴者アレクサンドル・ブロークらの革命後の運命である。魯迅は一九二〇年代半ば、トロツキーの『文学と革命』から、「アレクサンドル・ブローク」という一章を自ら訳しているが、魯迅はトロツキーの描いたブローク像を通して、ブロークという詩人の中に自己を重ね合わせている。プロレタリア革命の必然性の前に、滅び行く運命の旧社会から来た知識人（実は前章の毛沢東の発言Bもこのことと関連する）という共通の星のもとに生まれ、ついて行けるところまで、革命につき従った「同伴者」ブロークに魯迅は共鳴していたに違いない。そして、ブロークは

ロシア革命後、ほどなく詩が書けなくなり、死んでいく。そして、エセーニン、ソーボリ、マヤコフスキー。命を絶つ同伴者が続く。政治的弾圧だけでなく、時代の雰囲気が既成作家に創作をさせないこともある（同じく毛沢東のB参照）。おそらく魯迅が生きていれば、毛沢東が後に言っていたように、文連主席くらいの地位はあてがわれただろう。しかし、現実の中国革命の進行から見るに、魯迅は沈黙せざるを得なかったのではないか。王凡西や朱正が言うように、延安での王実味批判や建国後の胡風批判は、とりもなおさず、魯迅（精神）批判と等しかった。魯迅が生きていて、毛沢東のやり方に異を唱えたなら魯迅批判が展開されたにちがいない。魯迅はおそらく、社会主義改造のような経済制度の変更を支持するためにも、文化政策での異議には沈黙で応じるほかなかったのはないか。滅び行く旧社会の知識人という立場を甘受しようとした魯迅にほかの選択肢はなかったであろう。しかし、馮雪峰、丁玲、胡風批判から反右派闘争へと連続する動きに、自分のことならいざ知らず、弟子筋への攻撃にはもはや我慢の限界と筆を執る可能性もあり得たろうし、ジッドに似た正直さもある魯迅は文連主席として訪ソすれば、『ソビエト紀行』のような書を書く可能性もあったろう（もちろん中国やソ連では出版できない）。ジッドは世界中の共産党員からトロツキスト扱いされたのだから、その場合、人民共和国での魯迅の運命は推して知るべしだ。監獄でも書こうとしているか、沈黙しているか、毛沢東の羅稷南への回答はまさに正答そのものと言えるのではないか。

そして、馮雪峰に魯迅をまったく理解してないと酷評された毛沢東だが、永久革命者[36]魯迅の思想的政治的な本質は見抜いていたと言うべきなのだろう。

（注）

（1）竹内栄美子著『批評精神のかたち　中野重治・武田泰淳』（EDI出版、二〇〇五年）所収「魯迅への視線　中野重治と魯迅」参照。なお、中野の魯迅に関する文章は全集第二十巻（一九七七年刊のもの）に収録。

（2）『中野重治全集』第三巻（筑摩書房、一九七七年）所収。

（3）二〇〇四年秋、「中野重治の会」の金沢での「研究と講演の会」で金沢大学の丸山珪一が講演でこの作品を取り上げ、その後、「中野重治と魯迅――「秋の一夜」を中心に」として同会編「梨の花通信」五〇号に掲載された。丸山珪一は「秋の一夜」というタイトルにも魯迅の『野草』中の作品「秋夜」の影響を見ている。なお、中野と魯迅についてはこの丸山珪一論文、前掲竹内栄美子著のほか、林淑美著「魯迅・瞿秋白・中野重治」（「昭和文学

研究」第四九集、二〇〇四年）などがある。

（4）音から推察するに石田は武田泰淳がモデルか？　読者のご教示を請いたい。なお、武田には「魯迅と中野重治」という小文があり、二人の同質性を述べている。『武田泰淳全集』（筑摩書房、一九七九年増補版）第十三巻所収。

（5）前掲注3の丸山珪一論文でも引用されている部分である。

（6）陳明遠編『仮如魯迅活着』（文匯出版社、二〇〇三年）所収の何満子論文参照。なお、魯迅は晩年上海で国民党系のメディアで日本のスパイと中傷されていた。例えば「社会新聞」一九三四年五月六日付「魯迅願作漢奸」参照。ここでは『魯迅研究学術論著資料匯編1913–1983』第一巻（中国文連出版公司、一九九〇年）による。

（7）このことは内山書店『中国図書』二〇〇二年二月号所載の拙稿、「二〇〇一年度読書アンケート」で触れている。但し初出誌を誤っている。

（8）「批評の人間性一・二・三」（前掲『中野重治全集』第十二巻所収）参照。同時に同巻の著者うしろ書きや後年に書いた平野、荒に関する中野の文章も参照しないと中野の生涯における二人に対する評価はバランスを欠くことになろう。

（9）以下の拙稿を参照のこと。「『トロツキー派に答える手紙』をめぐる諸問題」、『日本中国学会創立50年記念論文集』（汲古書院、一九九八年一〇月）所収、及び「『トロツキー派に答える手紙』をめぐる諸問題（続）」、『蘆田孝昭教授退休記念論文集――二三十年代中国と東西文芸』（東方書店、一九九八年十二月）所収。

（10）拙稿「胡愈之について二三のこと」、「燎原」No.35、一九九〇年、参照。またこの問題については本文前掲代田論文、同著「魯迅は共産党がお嫌い!?」（「中国研究月報」No.648、二〇〇二年二月号）、及び厳家炎著「東西方現代化的不同模式和魯迅思想的超越」（「東方文化」二〇〇二年第二期所収、邦訳は日原きよみ訳「現代化モデルにおける東西の差異と魯迅思想の超越」、「中国研究月報」No.653、二〇〇二年七月号）、が言及しているが、上記拙稿が紹介した、この件に関して先駆的と思われる金城の二編の短文には触れていない。

（11）「あるがまま」という語の適否はこの際問わず、便宜的に用いることとする。

（12）「新文学史料」一九八六年第四期所載。

（13）龔育之・逢先知・石仲泉編『毛沢東的読書生活』（北京三聯書店、一九八六年）所収。ここでは同書増訂版、一九九六年刊に拠る。

（14）小山三郎著「毛沢東が読んだ魯迅文学」（「東亜」No.278、一九九〇年八月号）。なお、同著者の論文に「毛沢東の魯迅評価について」（「藝文研究」No.54、慶應義塾大学藝文学会、一九八九年三月）がある。

（15）前掲注13『毛沢東的読書生活』増訂版一七五頁。小山論文では当該掲載誌三六頁。ここでの訳は拙訳。なお、類書に孫宝義編『毛沢東的読書生涯』（知識出版社、一九九三年）、武在平著『巨人的情懐――毛沢東与中国作家』（中共中央党校出版社、一九九五年）などがあり、各々毛沢東と魯迅について触れる部分がある。

（16）これは魯迅作品とは言えないことは、中国でもすでに常識となっていると言ってよいだろう。前掲注9の拙稿のほか、最近のものとしては朱正著「重

読魯迅雑文」の「三、重読『答托洛斯基派的信』」（「魯迅研究月刊」二〇〇五年十期）参照。

なお、届いたばかりの二〇〇五年新版『魯迅全集』をみると、この「答托洛斯基派的信」は魯迅の作品として従前通り旧版全集同様に収録されている。残念ながら、相変わらず、魯迅口述・馮雪峰筆録となっている（このことに対する反論の詳細は上記拙稿参照）。しかし、トロツキーについての注は若干変化がある。十月革命での指導者としての経歴は旧版とそう変わらないが、革命軍事委員会主席（トロツキーには軍事人民委員＝閣僚、最高軍事評議会議長、共和国革命軍事評議会議長などの肩書きがあった）という具体的職名が明記され、旧版の「一九四〇年メキシコで死んだ」という表現が、新版では「一九四〇年メキシコで刺殺された」とスターリンの刺客による暗殺であることが暗示されている（歴史学上、これはもはや完璧な事実で解釈の余地はなく、中国でも周知のことに属するが、日本ではまだ共通認識になっていないことを痛感するときがある）。また、魯迅にこの手紙を書いた陳仲山（陳其昌）については、「河南洛陽の人」と原籍が加わったほか、「抗日戦争期間中、上海で抗日活動に従事していたため、日本軍に逮捕殺害された」という記述が加わった。これはこの「トロツキー派に答える手紙」が示唆するところ、及び、その後の王明、康生らの反トロツキー派キャンペーンによって、トロツキー派は日本軍から金をもらった「漢奸」とされてしまった歴史から見ると大きな前進である。またこれは、この間、陳其昌の遺児陳道同が書いた「陳其昌の死」を「魯迅研究月刊」二〇〇一年第四期（拙訳は「中国研究月報」二〇〇二年四月号）が掲載したような、政治的な変化を受けた措置であろう。『毛沢東選集第二版』（人民出版社、一九九一年）はすでに、中国トロツキー派を「漢奸」とすることを注で誤りとしている。陳道同のこの文章を同誌に推薦した者としては、この新版注の変化を歓迎したい。上記拙訳前書きでははっきり書けなかったが、陳道同は人民共和国建国前夜、鄭超麟らのトロツキー派運動から離れ、実は中共に参加していた。それで、北京大学、中国人民大学大学院へ進学するという道が開けたのだが、結局一九五二年のトロツキー派粛清でトロツキストとして逮捕され、五年ほどで出獄するが、以後現業労働者として定年まで働いたのである。なお、陳其昌の原籍は私も北京大学の档案館で在籍者名簿を閲覧した際、これを確認し、撮影してきている。こうした注の変化についてはまたいずれかの機会に詳しく述べたい。

(17) 『建国以来毛沢東文稿』第七巻（中央文献出版社、一九九二年）、二〇三頁。前掲易厳書八八頁に他書からの引用有り。なお中共第八回大会は例外的に二度にわたって開催された。なお、前掲注10の代田智明著「魯迅は共産党がお嫌⁉」は二〇〇一年に韓国で開催された学会での銭理群のペーパー「魯迅と毛沢東」に触れるが、そこにも「毛沢東が党内で孤立したり、劣勢におかれたとき、好んで魯迅を読み、魯迅を語った」とあるそうだ。

(18) 易厳書一三〇頁。易厳が依拠している資料は薄一波『若干重大決策与事件的回顧』上下（中央党校出版社、一九九一～一九九三年。修訂版は人民出版社、一九九七年）。第一版の下では一〇七七頁にこの部分が出てくるが、易厳の引用とは異同がある。ここでは易厳書に従う。なお、このテクストは『毛沢東文集』や『建国以来毛沢東文稿』には未収録のようである。

(19) この周揚のテクストは、易厳の引用とCD－ROM版「人民日報」とでは若干の異同がある。ここではCD－ROM版に拠る。二のテクストは『文化大革命資料』上冊、江青宛書信であるが、ここでは同書には当たれなかったので、易厳書の引用に拠る。ここの一、二は各々、易厳書七五頁と八六頁に見える。

(20) 易厳書五五頁に指摘がある。「十大関係論」の「二、沿海工業和内地工業的関係」の最後の部分。但し、現在の決定版テクストである『毛沢東文集』第七巻所収の同編にはこの部分は削除されている。日本語版東京大学近代史研究会訳『毛沢東思想万歳』(三一書房、一九七四年)や矢吹晋訳『毛沢東社会主義建設を語る』(現代評論社、一九七五年)にはこの部分が翻訳されており(それぞれ、九頁、七三頁)、両書の底本とした所謂丁本にはこの部分が確かにあったわけだ。ここでの翻訳は三一版に拠った。

(21) 同じく易厳書同頁に指摘がある。スノウの著は『中国の赤い星』のこと。Perikan Books 版 "Red Star over China" 1972 では一七六頁。訳は英語からの拙訳。

(22) 『毛沢東文集』第七巻(人民出版社、一九九九年)所収。当該文章は『毛沢東選集』第五巻(人民出版社、一九七七年)にも所収。なお、この引用部を含む一節は『毛沢東文芸論集』(中央文献出版社、二〇〇二年)にも「片面性問題(一面性の問題)」として収録されている。

(23) 「読書」一九九八年第九期所載座談会「人間魯迅」。本稿・上の本文二の(二)及び注19参照。なお、馮雪峰は晩年になって初めて毛沢東の「文芸講話」に批判的になったのではなく、当初から「講話」には批判的で、延安時代にすでに何其芳などから反毛沢東的と批判されており、そのことが後年の毛沢東による馮雪峰批判に繋がったという指摘がある。以下の資料を参照のこと。高華著『紅太陽是怎様昇起的』(香港中文大学出版社、二〇〇〇年)の第九章「従『延安之春』到闘争王実味」、特にその注70。包子衍他編『回憶雪峰』(中国文史出版社、一九八六年)所収の陳涌著「関于雪峰文芸思想的幾件事」。上海魯迅紀念館編『回望雪峰』(上海文芸出版社、二〇〇五年)所収の徐中玉著「我們今天如何紀念雪峰同志(序)」。この問題はいずれ別の機会に論じたい。

(24) 人民共和国建国から反右派運動に到る過程については同氏の著『文化大革命に到る道』(岩波書店、二〇〇一年)が詳しい。特に第十章「『百家斉放・百家争鳴』――夭折した可能性」、第十一章「反右派闘争」参照。丸山はこの後で本稿が触れる朱正について、「朱正は、五〇年代から魯迅研究でも着実な仕事を残しており、私もかねてから畏敬している研究者である」(同書三二一頁)と評価している。なお、丸山論文の行論においては毛沢東の羅稷南に対する答えの中にあったと周海嬰が言う「識大体」という言葉がかなり大きな意味を持つが、黄宗英の証言にはこの言葉はなく、朱正は現場の証人を尊重してこの言葉をなかったものとして行論している。本稿でも朱正に従う。

(25) 丸山論文の言うように、これはロデリック・マックファーカー他編・徳田教之他訳『毛沢東の秘められた講話』上下(岩波書店、一九九二年)を基本的に使用している。タイトルもこれに従っている。途中の「……」は省略を示す。また「随筆」という訳語は本稿での引用に当たり「雑文」と改めた。

(26) ただ黄宗英が描く、答えに際しての毛沢東の挙動、「『魯迅か、……』主席はかすかに身体を動かして開けっぴろげに言った」からは毛沢東の内面までは入り込みにくい。

(27) 河合秀和訳、岩波書店、一九六九年。

(28) ここでは特に以下の諸編を用いることとする。

1. 「魯迅『革命人』の成立」（「猫頭鷹」第六号、「新青年」読書会刊一九八七年）
2. 「魯迅革命文学論に於けるトロツキー文芸理論」（「日本中国学会報」第四〇集、一九八八年）
3. 「胡愈之についての二三のこと」（「季刊燎原」№35、一九九〇年）
4. 「魯迅「『竪琴』前記」の材源及びその他」（「桜美林大学中国文学論叢」第一六号、一九九一年）

(29) 汪暉著『反抗絶望』（上海人民出版社、一九九一年）、一三二頁注一参照。

(30) 前掲注28の拙稿1、2参照。

(31) 増田渉『魯迅の印象』（角川書店、一九七〇年）、六二頁。講談社ミリオン・ブックス版（一九五六年）では六七頁。

(32) 『魯迅全集』注によれば、『竪琴』は、上海良友図書公司刊のソ連短編小説集の翻訳、一九三三年一月刊。この件についての詳細は前掲注28の拙稿4参照。なお、学研版『魯迅全集』の訳はこの部分は致命的な誤訳である。また、岩波版『魯迅選集』の増田訳にもこの部分、誤植や不適当な注がある。

(33) 前掲注28の拙稿2参照。なお、丸山論文も結論部でこのことに触れる。なお、「文芸と政治の岐路」についての材源が鶴見祐輔著であることについては前掲注28の拙稿2を参照のこと。

(34) ソ連行きの件及びスターリン描写については前掲注28の拙稿3参照。資料のみ、参考のためここにも再録する。胡愈之「談有関魯迅的一些事情」（「魯迅研究資料」1、一爾雅出版社一九七三年）、金城「党的堅強戦士」（『胡愈之印象記』中国友誼出版公司、一九八九年所収）、同著「魯迅為何不去蘇聯治病」（「魯迅研究動態」一九八九年第五・六期合併号。「中華英傑」一九八八年第六期原載「懐念胡愈之」からの摘録）。なお、前掲注10に触れた厳家炎論文は胡愈之と魯迅の会見について紹介し、魯迅の挙げた拒絶理由に「ソ連の国内状況はどうですか。私は些か心配しています。やはり味方の中に問題が出ているのではありませんか」という言葉があり、胡はこれを「スターリンが粛清を拡大している」（日原訳による）と説明しているが、二人のこの部分の言葉が「魯迅研究資料」1では削除されたとする。おそらく、金城、厳家炎ともに材源は同じなのではないか。

(35) 「『一日の仕事』後記」、『魯迅全集』では『訳文序跋集』所収。

(36) ここはトロツキーの永続（永久）革命論の概念とは別の語として使っている。むしろ民主主義の永久革命者という意味で、丸山真男の「永久革命として民主主義」のような概念から援用した。魯迅は一九二六年三月執筆の「中山先生逝世後一周年」（『集外集拾遺』）でトロツキーを初めて引いて、孫文が真の永久革命者であったことを論証したが（前掲注28の拙稿1参照）、それは魯迅の自己規定とは別に、そのまま魯迅に贈られる称号でもあったろう。ただし、「民主主義の永久革命者」として。それは陳独秀とも相通ずるものである。

（付記）初校に際して、曹聚仁の『魯迅評伝』（香港世界出版社、一九五六年初版。ここでは台湾で出た、一九八七年刊とおぼしき香港東西文化事業公司版）と『魯迅年譜』（香港三育図書文具公司、初版一九六七年、ここでは一九七二年刊）を見る機会があった。杭州第一師範時代の馮雪峰の同級生であり、晩年の魯迅と親交をもった曹の魯迅評は、直接に魯迅を知る同時代人ならではのもので今さらながら興味深い。政治的、思想的に等身大の魯迅を描

いたこれら諸作について、曹聚仁本人は「百年の後、私が書いた評伝が、魯迅を血肉をもった生身の人間として描いており、事実を曲げた点は皆無だと認めてくれる歴史家がきっといるものと信ずる」（『魯迅年譜』二頁）と言っているとおり、中国革命や毛沢東のオーラの前で従前、見えにくかった部分が、人民共和国建国から五十有余年、魯迅逝去から七十年を経た今日、再び光を放っているように思われる。詳論の余裕はないが、本稿に直接関連する二点だけ紹介する。

一、魯迅を「同伴者」とする評価について。

曹聚仁は、二著を通じて何度も魯迅を「同伴者」と規定している。拙稿でも別資料をもとに繰り返し述べてきたが、まったく同感である。曹は魯迅自身が「同伴者」という自己規定の言葉（前掲注31参照）を増田渉に語ったことは知らなかったと思うが（ただし、曹も魯迅から直接そのようなことを聞いていた可能性はある）、同時代者の客観的な分析結果としてこの結論を導いている。これが当時の「常識」であったと考えるべきであろう。念のため、一カ所だけ『魯迅年譜』の「魯迅研究述評」から引用しておく。文中、馮氏とは馮雪峰のこと。馮雪峰が「革命与知識階級」（一九二八年作）という文章で魯迅を「同伴者」と規定しながら、後に『回憶魯迅』（一九五二年）でそれを撤回したことに関しての批判である（この件については前掲注28の拙稿1・2が触れている）。

思うに、馮氏の以前の言葉は決して言い間違いではない。魯迅はもともと同伴者に過ぎず、必ずしも積極的革命分子の役を割り振らねばならないというものではなかった。逆に、同伴者が社会の進歩を推進する効果は積極分子のそれに及ばないとは限らないのである。馮氏が、自分は言葉を間違えたと考えることの方こそ、本当に言葉を間違えているのだろう。これもまた教条主義の誤りである。（一六六頁）

二、「もし魯迅が生きていたら」についての曹聚仁の答え

本稿のテーマ、「もし魯迅が生きていたら」についても曹聚仁は「魯迅研究述評」で簡単に述べていた。やや長くなるが、以下に引く。

面白いテーマが私の前に持ち出されている。とりもなおさずそれは、魯迅がもし今まで生きていたら、中共はどう対していたか、また、魯迅は中共にどう対していたか、ということである。胡風が粛清されるのを目の当たりにした胡適の言い方に従えば、魯迅も粛清、闘争を免れなかっただろうということになる。私の考えはと言えば、胡適はニューヨークに行って、結局のところ井の中の蛙になってしまい、中共の政策がわからなくなってしまっているのだと思う。胡適がもし北京に留まったとして、決して粛清されたりはしなかったろうと私は敢えて断言する。胡適は相変わらず自分の歴史研究、紅楼夢研究の考証をやり続けてきっとより豊かな成果を挙げていただろう。生活は少々苦しくなったかも知れないが、胡適生涯の願いは間違いなく、完全に達成されただろう。彼の後半部の著作が、あのように何度も願をかけても完成しないというようなことにはならなかったろう。「人をしてその才を尽くさしむ」ということに関して、中共はなかなかのものだ。魯迅先生が今、生きていたら、創作においてどんな成果を挙げてい

たかについては、私には語る勇気がない。しかし、学術研究では、先生は驚くべき成果を挙げていただろう。これは断言してもいい。少なくとも魯迅のあの中国文学史は間違いなく、書き上がっているだろう。思想上の自己批判については、魯迅は一貫してまじめで、あの創造社の攻撃を受けたときには、社会主義文芸理論の研究に勤しみ、あっという間にライバルたちより詳しくなってしまった。魯迅がもし今、生きていたら、中共政権のために新しい文芸理論を打ち立てることもできたろう。（私たちは、中共が政治コースも自前の北京路線を打ち立て、モスクワ路線に依存していないことをはっきり理解すべきである）。（一七八頁）

上海政協文史資料委員会・上海魯迅紀念館編『曹聚仁先生紀念集』（上海文史資料選集第九十六号、二〇〇〇年第一期）所収の「曹聚仁年譜」によれば、『魯迅年譜』の初版刊行は一九六七年、また『魯迅年譜』の曹聚仁自身の「編者序言」は一九六六年の執筆である。つまり、曹聚仁の「魯迅が生きていたら」についての答えは、文化大革命勃発前後か、それ以前のものということになる。毛沢東とも謁見可能な（一九五六年、二人は北京で会見している）香港の愛国民主人士という曹の政治的立場に照応するかのように、今から見ればここの観測は甘さが目立つ。

ともあれ、おそらく、曹聚仁のあるがままの魯迅理解という観点が今、大陸でも見直されつつあるのであろう、本年一月に復旦大学出版社から『魯迅評伝』（『魯迅年譜』を付録として収録）が出版されたとのことだ（発注中につき未見）。

（付記その二）再校に際して一九九九年東方出版中心版の『魯迅評伝』がわが書架にあるのに気づき、その序文、陳漱渝著「毋求備于一夫―読曹著『魯迅評伝』」を目にした。本書端書きには東方出版中心版が大陸では初めて出版される曹著『魯迅評伝』であることが明記されており、陳序文には本書に関する特徴紹介とそれに対する陳漱渝自身の異論が併記されている。特徴紹介の方は拙論とそう矛盾はなく、大いに参考になった。ただ、異論の方は、特徴否定に繋がる点が多々あってあまり賛成できなかった。